

園児の生命を守るために必要な文章力トレーニング

—— 文章力低下から見えてきた問題点と対策について ——

佐藤 達全¹⁾

Writing Training Required to Secure the Lives of Preschoolers :

Issues Revealed by Declining Writing Skills and Countermeasures

Tatsuzen Sato

Abstract

Writing is an indispensable skill for social life, perhaps because it is often considered necessary for oneself and others to accurately communicate thought in writing and keep a record of them.

However, as the saying goes, “style reveals the man,” a sentence that conveys not only the humanity of the person who wrote it, but also his or her skills.

The author of this paper has spent many years teaching writing to students aspiring to be preschool teachers. Previously, the goal of the author’s classes was to foster the ability to accurately write sentences on contact sheets for parents and practice journals as well as childcare records to be written as a preschool teacher. However, recently, the author has come to believe that students’ writing training leads to enhancing preschoolers’ ability to secure their lives. Therefore, the author would like to investigate the link between writing and securing the lives of preschoolers.

Key words: increased accidents in kindergartens, circumstances surrounding increased accidents, lack of attention, decreased sense of responsibility, what writing skills show, writing training as a safety measure

キーワード: 園内事故増加, 事故増加の背景, 注意力欠如, 責任意識低下, 文章力が示すこと, 安全対策としての文章力トレーニング

1. はじめに

2022年9月5日、静岡県内の認定こども園に在園していた3歳児（女児）が通園バス内に置き去りにされて死亡した。一年前にも福岡県内の保育園で同様の事故が発生して5歳児（男児）が死亡しているので、二年続けてである。その際にも、国は園児の登園確認の徹底を求める通知を出して

いるが、わずか一年後に再び同種の事故が発生してしまった。内閣府によると、子どもの安全が守られるはずの保育施設において、2021年中に発生したケガなどの事故が全国で2347件（子どもの死亡は5件）あったという。

今回の事故に対しても原因究明や事故防止策などが進められているが、ある新聞の社説には「命を預かる責任感が薄すぎる」という厳しい見出し

1) 育英短期大学名誉教授

がつけられていた^(註1)。筆者も同様の考えで、昨年の事故も含めて責任感が欠如しているのではないかと考えている。通園バスに乗車していた職員はもとより、教室にいなかった園児の所在確認をしなかった担任の保育教諭は何をしていたのだろうか。「園児の命を守る」という意識が欠如していると言わざるを得ない。

しかし、筆者は事故が発生した園の関係者だけを責めても問題は解決せず、今後も同様の事故が発生する恐れがあると考えている。その理由は、この事故の背景には日本中に広がっている〈深刻な背景〉が存在すると思うからである。そこで、本小論ではその深刻な背景を指摘すると共に、園児の安全が守られる保育環境構築のための方策（保育者養成校における授業のあり方、特に文章の書き方）等について考えてみたい。

2. 通園バス内に園児の置き去りが発生する背景

報道によると、今回の事故が発生したこども園では、これまでも通園バスのミスが常態化している、園児の「欠席」勘違いが何度も発生しているという。こうした事態に対し、専門家は「子どもを預かる施設としての基本ができていなかった」と指摘している。

事故の原因として当該園の副園長は「乗降時のルールに不備があった」「取り残された園児がいないか2人以上で車内を確認しなかった」「クラス補助が規定の時刻より早く登園管理システムの画面を確認した」「担任は女兒の不在を把握していたが保護者に連絡しなかった」の四つのミスが重なったと説明している。こうした説明を聞いてみると、「あまりにも基本が守られていない」園の実態に呆れるほどである。

当然のことながら今回の事故発生後、テレビや新聞にはさまざまな視点からの見解が取り上げられている。

①送迎バスの安全手引きが整備されていないこと。

内閣府によると、保育施設や幼稚園のバスによる送迎は、保育活動や教育活動に該当しないため、国が定めた安全管理マニュアルはないという。

②政府は、通園バスを所有する全ての幼稚園や保育所、認定こども園などを一斉点検する方針を決めた。

一斉点検は、各施設が乗降時の人数チェックなど、国が通知で示した注意事項を守っているかどうかを確認して自治体に報告させる方法だという。その上で、自治体の職員が各施設を訪れて詳しい実地調査を年内に終わるという内容である。

③安全管理マニュアルだけでなく、送迎バスに「安全装置を義務づけるべき」という意見も少なくない。

ある新聞の社説では、「安全装置義務化が必要」と題して、「緻密なマニュアルがあっても実行するのは人間だ。必要なのは、ミスが重なっても命を救える仕組みだ」として、「取り残された園児を人感センサーで検知し警報を鳴らすなどの安全装置を義務づけるべきではないか」と提案している^(註2)。

保育施設は保護者から「かけがえのない大切な命」を預かる場であるから、その命が傷ついたり失われたりしないよう最大限の注意を払うことは当然である。もちろん、幼稚園も保育所も認定こども園も「教育施設」としての位置づけがされているのであるから、「長い人生の基礎作りをする」重要な教育の場であることもまた論を俟たないであろう。

しかし、命は誰にも「一つしかない」ものであり、ひとたびその命が失われた場合には二度とこの世で暮らすことはできなくなるのであるから、保育活動における安全の確保・事故防止は何より

も優先されなくてはならない課題のはずである。

しかも、子どもの行動は大人の想像力をはるかに超える場合が少なくないから、子どもの命を守るには、そうした子どもの行動特性を前提にした、臨機応変の対応が求められることは当然であろう。それゆえ、ある保育関係の事典には、事故防止に関して

事故はいつどこで発生するか分からない。それが発育していく子どもの生活の特徴である。しかも年齢差のある子ども達が集団で生活しているのであるから、そこで起こる事故は多岐にわたっている。(中略) 子どもの事故の特徴は、いつでもどこでも起こり得るということである。また、事故を起こしたときの状況は、そばにいた保育者が、ほんのちょっと目を離したすきと

と説明した上で、

〈事故の防止は、事故を起こしそうな状況を作らないということに尽きよう。〉

と締めくくっている(下線は筆者)^(註3)。

もちろん、そのためには常に子どもから目を離さず、その行動を予測しながら危険を予防するための対応が求められるのだが、そこには、非常に高度な状況把握と臨機応変で素早く対応する能力が求められることは明らかであろう。

それに対して、近年の保育現場で発生している事故の多いことを考えると、残念ながら問題を抱える保育者が存在するのではないかとわざるを得ない。筆者は40年以上にわたって保育者を養成する短大で学生と接してきたが、近年は「このような判断力や対応で子どもの命や安全が守れると思っているのだろうか」と不安を感じる行動をする学生が多くなってきたとわざるを得ない。参考までに、筆者がこれまで直接に実習先から指

摘された極めて初歩的な行動の事例をいくつか紹介しておこう。

【事例1】保育室で子どもと積み木遊びをしているとき、床にべったり座りこんでいる。「立て膝」の体勢で、とっさの時にすぐ対応できるようにと、何度注意されても無意識のうちにお尻をべったり床につけているとのこと。

【事例2】園庭で遊んでいるとき、目の前の子どもの行動に気をとられて、実習生の数メートル後方で鉄棒から落ちて泣いている子どもに全く気づかないことがある。

子どもの動きや周囲の音に絶えず注意を向け、安全を守れるように心がけましようとの指摘を受けた。

【事例3】園庭の掃除をしているとき、「錆びた釘」やガラス片が落ちていたのにそのままにして、拾わなかった。

子どもが遊んでいる時にケガをする恐れがあるので、釘やガラス片などを見つけたときは安全を考えて拾うように注意された。

これらの指摘に共通しているのは、子どもの安全を守るべき保育者は、いつでも周囲に目配りをしていて、危険につながるとされる要素を取り除かなくてはいけないということであろう。ただ、こうしたことは言葉で言うのは簡単だが、「何が危険につながるだろうか」「それを防ぐにはどんな行動が求められるか」は、そのつど自分で判断して瞬時に行動しなくてはならないため、今の学生にとっては「非常に難しい課題」のように感じられる。

その理由の一つは、兄弟が少ないなかで、「至れり尽くせり」の環境を用意されて成長してきた学生が多いため、指示待ちの傾向が多く「自分で考えて行動しなくてはならない場面が少ない」からではないだろうか。

筆者は以前、小児科医の友人から「最近、転んだときに顔面をすりむく子どもが多くなった」という興味深い話を聞いたことがある。昔は手や

膝をすりむく子どもが多かったのに、今の子は「顔を守ろうとするとっさの行動ができない」からだとその友人は話してくれた。いつも親によって大事に守られていると、反射神経が鈍ってしまうのではないかというのである。論理的な話ではないものの、子どもに愛情をかけることと過保護との線引きは難しいと感じた。

子どもに限らず、現代の社会ではさまざまな生活用品が揃っているため、自分の手を使って行動する場面が減っている。その代表的な例は、掃除や洗濯や食生活であろう。子どもや学生だけでなく、最近は気になる大人も増えている。

蛇足ではあるが、筆者が住職をしている寺の境内に設置されたトイレの入り口の引き戸を開けたまま帰る利用者が多くなった。また、信じられないことであるが、墓参りの水を手桶に入れた後で水道の蛇口を止めない人すら時々見かける。

そのため、知識を増やすことばかりに汲々としていたりあまりに「便利」で「自動化」された環境で生活したりしていると、私たちは、一つ一つの行動を振り返ったり「ケジメ」をつけたりすることを忘れてしまうのではないかと考えている。^(註4)

3. 保育者を目指す学生の問題点と対応

筆者はこれまで、保育者論・保育実習（教育実習）指導・保育課程論・文章作法・道徳教育等の授業を担当してきたが、最も長く関わってきたのは実習指導と文章作法である。

保育者を養成する現在のカリキュラムでは、幼稚園の教育実習・保育所と施設の保育実習にはそれぞれ半期の「実習指導」の授業が必修になっているが、筆者が勤務し始めた当初は、実習を開始する2~3週間前に集中して2回ほど、保育現場で実習するための基本的な準備（言葉遣いや挨拶・事前指導の日程調整や受け方）や提出書類・実習終了後のお礼状等に関する注意点を説明するだけで、学生は何の問題もなく実習を終了するこ

とができていた。

また、実習日誌についても、ほとんどの学生は基本的な文章力を身につけていたため、日誌が書けない（文章力に問題がある）といった指摘はほとんどなかった。ところが、大学全入時代とも言われる現在は、実習日誌が書けないだけでなく、目上の人との正しい会話や挨拶の仕方すら身につけていない学生が非常に多くなった。

それどころか、「何のために実習するのか、子どもとどのように接したらよいのか」といった、実習の目的や基本的な行動の仕方さえも十分に認識できていない」と指摘される学生も1人や2人ではないのである。

そのため、現在の養成カリキュラムでは「実習指導」の授業が必修になり、それに加えて、養成校の多くが初歩的な文章の書き方の指導までも行わざるを得なくなっている。学生の文章力に深刻な問題があることについては、筆者も以前にその問題点を指摘したことがある^(註5)。

筆者の記憶では、昭和から平成に変わった頃までは、学生の文章に誤字や脱字はあるものの、授業中に間違いを指摘すると大部分の学生は適切な表現方法を身につけることができたが、その後の学生の文章力低下は、まさに坂道を転げ落ちるようであった。そのことについて、上掲の拙論の概要には次のように記してある。

大学生の「文章力が低下した」と言われて久しい。レポートの文章に話しことばが紛れこんでいたり、「である」調と「です・ます」調が混在していたりするのはいよいよ、意味に関係なく同じ発音の漢字が使われることも少くない。ひどいものになると、「て・に・を・は」さえも正確に表記されていない文章も見受けられる。当の本人はそんなことには一向に無頓着で、間違いを指摘すると、なぜそんな細かなことまで言われなくてはならないのかという表情である。^(註6)

筆者の「文章作法」の授業（授業の目標は、正しい日本語の文章の書き方を身につけること）は演習科目のため、学生に文章を書いてもらって間違いがある場合は正しい書き方を身につけることを目標にしていた。そこで、授業の中で学生の書いた間違っただ文章を取り上げて正しい書き方に直してもらった作業を基本に進めていた。その目標を達成するために、学生には毎週の授業後に課題を提示し、課題にそって自宅で作文（400字）を書いて翌週に提出してもらった。提出された文章の問題点を筆者がすべてチェックして翌週に返却し、授業の教材に用いていた。

ただ、その際に「学生が意欲的に学習に取り組むように」と、一つだけ工夫をしたことがあった。それは、間違いをチェックするだけでなく、合格点を与えてもよいと思った文章には「○」をつけて返却することである。○をつける基準はそれほど厳密なものではなかったが、15回の授業を終了した最後の課題「添削指導を受けて思ったことと今後の課題」（これは毎年変わらない課題であった）を読むと、何回もチェックばかりされていた学生が、初めて自分が書いた作文に○がついていたときの感動がどれほど大きいか伝わってくるため、毎年○をつけることを続けてきた。

これまでの経験から、誤解を恐れずに言うならば、本学に入学する高校生は、決して偏差値が高いわけではない。真面目に高校生活を送ったりクラブ活動に打ちこんだりしていても、学習面で評価される経験が多くないことが想像される。それだけに、頑張って書いた文章に○がつくことは大きな励みになると考えたのである。

さて、前掲の拙論には当時の学生の作文に多く見られた代表的な「間違い」が次のように記されている。^(註7)

- ①誤字や当て字が多い。
- ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしい。

③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていない。

④話しことばのまま書かれている。

⑤「見れる」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など「最新のはやり言葉」のような表現がしばしば登場する。

⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくない。

⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っている。

⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないので、ものや人の名前などを何度も繰り返し書いている。

⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多い。そのため、一つの文章が200字～300字も続いている文章を時々見かける。

⑩推量表現（～ではないでしょうか）がほとんど見られない。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからであろう。

それに続けて、実際に学生が提出した文章も取り上げているので、当時の学生の文章力を知ることができる。そして、筆者はそのような文章力をなんとか改善しようと、毎週の課題文をすべてチェックして返却し、授業中にその文章をテキストにして正しい文章力が身につくよう取り組んだ。当時の保育学科の学生は約150名ほどで、150枚（400字）の原稿に目を通すのはかなりの時間が必要であったものの、学生の前向きな反応に支えられながら続けてきた。

そして、15週の課題が終了した後の最終レポート課題は「課題文の添削を受けて思ったこと」である。前掲の拙論には、その一部が紹介されているが、そこに書かれた学生の感想は学生指導の重要なヒントが顔を覗かせているので、そのいくつかを紹介しておこう。（筆者注：学生は「添削」

と書いているが、筆者は「間違いをチェックするだけにしていた。その理由は、授業中に、なぜ間違いなのか、どう直したらよいかを学生自身に考えてもらいたいからである。

【学生1】 小学校の頃から作文は何度も書いてきましたが、今まで添削してもらったという経験はあまりありませんでした。そして今回の授業で、どれほど自分が間違っていたかということがわかりました。

【学生2】 文章の添削をしていただいて、改めて文章を書くことの難しさを知りました。

【学生3】 私は書くことが苦手でしたが、毎週書くことにより、少しずつ書くことになれてきたように思います。

【学生4】 これからは、辞書をこまめに引くようにしたいと思いました。

【学生5】 添削をしていただいた文章を見ると、書く回数を重ねるにつれて間違いが少なくなっていくのがわかりました。何度も書くことによって文章に慣れることは大事だと思います。

【学生6】 今まで作文を書いて先生に提出しても、丸がついているだけだったりはんこが押してあるだけだったり、添削していただいたことはありません。そのため、間違いを正しいと思いこみ、そのままにしていました。でも、この授業で直すことができ、本当によかったと思います。

【学生7】 漢字を間違えると、意味が変わってしまうので、気をつけようと思いました。

4. 当時の学校教育の状況

文章作法の授業を受けた学生の反応は、非常に真面目で前向きであることがわかるのだが、その頃にはすでに全国的に大学生の学力低下がかなり深刻化し、小中学生の学習意欲にも問題が発生していることが指摘されてきた。

日本経済新聞（2002年11月2日）は「学力階

層化社会が進展している」として、「学力格差の拡大だけでなく、格差が父親の学歴と深く結びついていた」と指摘している。その記事の中には、早稲田大学の学生生活調査報告書が紹介され、「学生のおよそ半数は、授業以外の勉強時間が週に5時間未満にすぎない。（中略）2人に1人は、研究・勉強のために一か月に読む専門書や教養雑誌の数が1、2冊と答えており、大学生の勉強離れ・書籍離れは深刻だ」と報じている。

同様のことは、同じ日経新聞の特集「ニッポンの教育」に「学ばない症候群」という見出しで次のようなショッキングな記事が掲載されている（2006年12月5日）。

「中学に入ったばかりなのに『もう勉強はあきらめた』『今さら追いつけない』と漏らす生徒が増えてきた」。新入生に勉強の悩みを聞いて回る東京都内の公立中学校長（59）はここ数年の変化が気になって仕方がない。聞けば「算数が分からなくなったのは小学三年生ごろ」と返ってくる。「以前は一割にも満たなかったのに最近は一割に上る」と校長は言う。「授業が分からない」→「面白くない」→「勉強嫌い」→「勉強拒否」。多くの子供が今、この「負のスパイラル」に陥っている。

神奈川県教育委員会の調査では、県立高校二年生の51%が学校以外で全く勉強をせず、八割以上が一日に一時間の勉強もしない。一方、難関大学を目指し猛勉強する生徒は、以前の受験競争以上の少数激戦を強いられる。しかも試験に無駄な知識はそぎ落とされ、限られた学習のフィールドで競う。履修漏れでは世界史を学ばない高校生がいることがかつての受験生を驚かせた。

この記事に登場するような「勉強嫌いの中学生」に関しては、その後の「教育学術新聞」に、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が

共同で実施した調査結果の一部が報告されている(2017年4月26日)。それによると、「勉強が嫌い(まったく+あまり好きではない、以下同様)は、小一～六年生では二～三割にとどまる。しかし、小六年生から中二年生にかけて26.0ポイントも増加し、中二年生で約六割に達する」という。

この小論は学力低下を展開することが目的ではないので、これ以上の言及はしないが、学生の文章力が低下したとは言っても、本学保育科の学生の文章力は取り組み方によっては、「課題文の添削を受けて思ったこと」で紹介した何人かの文章からも改善の見込が期待できる状況であった。そして、実際に当時の学生の多くは保育現場でそれなりの責任を果たしているようである。

けれども、それから後の学生の文章力低下は筆者の予想を遙かに超えるものであったと言わざるを得ない。その後の状況については、『育英短期大学研究紀要』第39号に掲載した拙稿「短大生(大学生)の文章力に関する問題点を考える—短大生の経年変化ならびに四大生とも比較して—」で報告したので、ここでは触れないが、筆者が短大生の文章力低下を初めて取り上げたころは、それほど関心は持たれなかった。

例えば、筆者はこの問題を2006年に開催された全国保育士養成協議会第45回研究大会で口頭発表した。発表に対する質問はそれほど多くなかった。その後も筆者は第51回研究大会まで、学生の文章力低下に関して視点を変えた発表を毎年続けて来たところ、次第に質問や問い合わせが増えてきた(註8)。

その一方で、『育英短期大学研究紀要』にも7本の論文や報告を載せ、さらに『育英教育論集』でも視点を改めて学生の文章力についての報告を続けてきた。その結果、筆者が『育英短期大学研究紀要』に掲載した論文を引用したり紹介したりする論文も20本を超えている。このことは、多くの養成校が学生の文章力の低下への対応を迫られていることを意味しているのではないだろうか。

実際に、群馬県内のある園では新採用の保育者に(朝夕の送迎時に)保護者との対面をさせなかったり、連絡帳を書かせなかったりという事例が発生しているということを知ったことがある。その理由は、新採用の保育者の言葉遣いがあまりにひどいためであり、連絡帳の文章も間違いばかりのため、先輩保育者が1か月ほど特別に指導したものの改善が見られなかったからだという。筆者も卒業生から相談を受けたことがあるので、応急的な対応を指導したものの、なかなか改善は見られなかった。改めて土台づくりの重要性に気づかされたのである。

大学生にもなって文章が書けないなどという信じられないかもしれないので、前掲の「保育科学生の文章表現力について」(『育英短期大学研究紀要』第19号)で取り上げた、学生が実際に書いた「正しくない文章」の実態を紹介しておこう。

①敬語に関連して

何で今まで添作してくれなかったのだろうと不思議に思いました。

②同音異義語に関連して

同じ誤ちを子ども達がしています。

実習中は急がしい日々を送りました。

初めてのことで不安や緊張など複雑な気持ちで実習に望みました。

以外に道が空いていました。

先生は心良く引き受けてくださいました。

完璧にすることは無理かもしれません。

除々に文章力がついてきました。

③並列の「たり」に関連して

活発な子は木に登ったり少し高いところからジャンプしていました。

注意をしたり叱った後は必ずフォローが必要だと思いました。

④主語と述語に関連して

私の夏休みの過ごし方は、まず7月末から8月にかけてバレーボールの大会があります。

そこで良い成績をとり、チーム全体の力をつけて自信をつけたいと思います。

⑤説明文に関連して

今回の教育実習で、私が特に力を入れたいことは、一年生のときにできなかったことがクリアできるように意識して実習に臨みたいと思います。

良かったと思うことは、学校の授業で手遊びをしたのでとても役に立ち、堂々とできました。

責任実習を経験してわかったことは、保育者自身が楽しもうとする気持ちを大切にし、また、子どもへの言葉がけを多くすることが大切だと思いました。

反省点は、絵の具の用意をしている間に、子ども達を待たせてしまったので、そういう所で気を配ることができたら良かったと反省しました。

私がA園を志望したのは、のびのびしていて明るい保育園だと思いました。

今回の実習で学んで来たいことは、どう指導計画をたてて、子どもたちを指導し、援助し保育を展開していくのかを理解したいと思います。

⑥「て・に・を・は」に関連して

一つの文に同じ言葉をくり返し使われていました。

今回の実習で、自分の課題がどの程度達成したかということ、自己判断ですが、50パーセント位しか達成していないと思います。

⑦文章の構成に関連して

何もしないで一日が終わってしまう一日がありました。

今まで保育士になるためにいろいろ勉強や高校生の時からピアノを習い始めました。

今回の実習が、私にとって意味のある実習になったことが、私の成長につながると思いました。

⑧話し言葉に関連して

実習を振り返ってみて少しではありますが、達成できたんじゃないかと思います。

一日の責任実習でも半日実習の反省は少し活かされたけど、やっぱりうまくいきませんでした。

⑨同じ語のくりかえしに関連して

5月18日から三週間、幼稚園の実習です。私が実習させていただく幼稚園は、O市にあるS幼稚園という、定員80名ほどの幼稚園です。

今回の実習は前回の観察実習とは違い、参加実習もあるので、より一層気持ちを引き締めて頑張りたいと思います。

今回の買い物は、自分たちのものを買に行ったのではなく、数日後の母の日にわたすプレゼントを買いに出かけたのだ。

5. 近年の学生の文章力低下が意味する深刻な問題

筆者は、2022年3月に発行された『育英短期大学研究紀要』第39号に掲載した拙稿「短大生（大学生）の文章力に関する問題点を考える—短大生の経年変化ならびに四大生とも比較して—」で、最近の学生の文章について次のように指摘した。

筆者が20年前に短大生の文章力の低下を問題にした頃に比べると、大学全入時代まっただ中における短大生の文章力の低下はすさまじいものになってしまったと言わざるを得ない状況である。誤字や送り仮名の間違いは言うに及ばず、主語と述語の繋がらない文章が頻繁に登場し、話し言葉と書き言葉が同居する状態で、取り留めもなく100字から200字も句点を打たずに続けられる文章も珍しくなくなった。

しかも、こうした状況は短大の学生だけでなく、

授業を兼務していた四大生の文章でも同様であった。具体的な事例は省略するが、筆者はこのような状況で「子どもの命が守れるだろうか」という不安が生じてきた。そのときに思い浮かんだことが、近年、保育現場での園児の事故が多発しているという現実である。

そこで改めて学生が書いた実習日誌の文章に目を通して見ると、以前は文章の書き方の間違いを正すことを中心に指導していたのだが、「文章を書いている学生の注意力が欠如している」のではないかということに気がついた。

そのため、筆者は再度、実習日誌の「今日のふり返りと今後の課題」という13行の文章と、実習期間全体をふり返っての「実習を振り返っての反省・気づき・課題」という22行の文章を読み返した。それは、A4の実習日誌の半分ほどのスペースに、その日の活動の反省と翌日に向けての課題等を書く毎日の振り返りと、実習全体を振り返って書く文章である。

筆者が実習指導を担当していたときは、一日の「ふり返り」と「今後の課題」という二つのテーマを書くのであるから、実習指導の先生が読みやすいように段落を二つに分けて書くこと、そして実習期間全体を振り返っての感想は22行で少し長めのために「起・承・転・結」の四段落か「序論・本論・結論」の三段落で書くように指示していたのだが、段落を分けていた学生は一割にも満たなかった。

それどころか、わずか13行と22行の短い文章であるにも関わらず、漢字や送り仮名の「ちぐはぐ」な書き方（一方は正しい書き方だが、他方は間違った書き方）をしている学生があまりにも多いことに呆れるほどであった。煩雑かもしれないが、実態を知っていただくために、その具体例を紹介しておこう。

- ①先生と話しました ↔ 保護者と話しました
- ②実習に臨みました ↔ 実習に望みました

- ③こども達 ↔ 「達」の作りを「幸」と書く
学生も少なくない
- ④礼儀 ↔ 礼義
- ⑤迎えに来る ↔ 向かえに来る
- ⑥子どもと接しました ↔ 子どもと接しました
- ⑦ふり返りました ↔ ふり返りました
- ⑧芽生える ↔ 目芽える
- ⑨悔しい ↔ 悔やしい
- ⑩徐々に慣れました ↔ 除々に慣れました
- ⑪事前に調べました ↔ 時前に調べました
- ⑫見づらい文字でした ↔ 見ずらい文字でした
- ⑬早く帰りました ↔ 早く帰りました
- ⑭完璧に準備しました ↔ 完璧に準備しました
- ⑮近づきました ↔ 近ずきました
- ⑯真剣に聞きました ↔ 真険に聞きました
- ⑰子どもに手を貸す ↔ 子どもに手を借す
- ⑱参考になりました ↔ 参行になりました
- ⑲年蜜な計画でした ↔ 綿密な計画でした
- ⑳とても困りました ↔ とても困りました
- ㉑やりづらい計画でした ↔ やりずらい計画
でした
- ㉒細かい指導をする ↔ 細い指導をする
- ㉓自信がなかった ↔ 自身がなかった
- ㉔しっかり受け止める ↔ しっかり受け取る
- ㉕信頼感を持つ ↔ 親頼感を持つ
- ㉖代わりに読みました ↔ 変わりに読み
ました
- ㉗関心しました ↔ 感心しました
- ㉘驚きました ↔ 驚ろきました
- ㉙比べました ↔ 比らべました
- ㉚積極的に話しました ↔ 責極的に話
ました
- ㉛間違いに気づきました ↔ 間違えに気づ
きました

実習日誌を読んでいるとこのような表現が後から後から見つかるので、この辺で止めておくと、わずかに13行と22行の文章中に、上述のようなちぐはぐな書き方が次々に発見できた。もちろん、一人の実習日誌に書かれているのは一例か二例なのだが、同じページに書かれている文章で、一方は正しく表記されているのに、もう一方（3か所の場合もある）の表記がなぜ異なっているのかわかるか。まさに注意力が不足しているのと同じか、あるいはわざと異なっているのかわかるか。まさか注意力が不足しているのと同じか、あるいはわざと異なっているのかわかるか。まさか注意力が不足しているのと同じか、あるいはわざと異なっているのかわかるか。

しかも、こうした書き方をほとんどしていない学生は一割にも達していない。これでは、園児の安全を守るために周囲に満遍なく目を向けることなど、とても期待できないのではないだろうか。子どもは、思いがけない行動をすることが少なくないのであるから、保育者には、常に子どもの行動に注意を向けてその行動を予測すると共に、とっさの対応が求められるのである。

もちろん、こうした「注意力の欠如」とも思えるような書き間違いだけでなく、前掲の拙論でも紹介したような「おかしな」文章を書く学生は年を追うごとに多くなっている。

【おかしな文章】の例

- ①今回実習させていただき感じたことは、保育園というのは0歳児から5歳児まで様々な年齢の子どもたちが生活していて年齢によって受け入れ方もまったく変わり、0歳児や1歳児だと知らない人への抵抗が強くある子もいて、なかなか受け入れてもらえず、どう関わればよいのかとても難しいと感じました。（主語と述語がつながらず、文になっていない・文が長い）
- ②実習4日目を終え、今日は2歳児クラスで実習させていただきました。（文がつながっていない）
- ③読み聞かせをして思ったことは、もっと子どもに問いかけたり読み方を工夫することで、

子どもの興味をもっとひくことで盛り上がるなど感じました。（思ったことはという主語に、感じましたという述語は繋がらない）

- ④自分なりに頑張りたいことは、責任実習をさせていただくので子どもたちが楽しめるような保育を行っていきたいです。（主語と述語がつながらない）
- ⑤今日はバレンタインデーということもあり、女の子から男の子へプレゼントを作り渡したけど、作業途中の女の子たちの楽しそうな顔や、男の子たちのドキドキしてる顔などあまり見られない顔がたくさん見れた気がしてとても楽しかったです。（おかしな文章の代表とも言える）

何人かの文章を紹介しただけであるが、このような「正しくない書き方」の文章が、ほとんどの実習日誌に見られ、筆者が前掲紀要第19号で指摘した頃に比べると、文章力の低下が一段と深刻になっていることは明らかであろう。そして、このことは単に「適切な文章が書けない」という問題に止まらず、「園児の命を守るための注意力の低下」にもつながっているはずである。

近年、保育学科に入学する学生と話をしていると、「かわいい子どもと関わりたいから」という入学の動機を話してくれる学生は極めて多いのだが、保育者が「子どもの安全を守る仕事」であるという意識はほとんど感じられない。

誰が言ったのかは不明であるが、「文は人なり」と言われてきた。ある人が書いた文章を読めば、それを書いた人の考えが伝わってくることは当然だが、文章が伝えているのはそれだけではない。書いた人の人間性から能力に至るまで、実に多くの情報が読み取れるからである。言いかえるなら、上に例示したような文章を書く学生の注意力が欠如していることが伝わってくる。

文章を書いたら見直すことは当然であるが、指導者に提出する実習日誌ならなおさら、ひと文字

ひと文字を注意して書こうと考えるはずである。さらには、小学校や中学校で初めて習う漢字の書き方や送り仮名を正確に記憶する作業も不可欠なはずではないだろうか。「うかんむり」なのか「わかんむり」なのか、「幸」のように「よこぼう」が二本なのか「達」のように「よこぼう」が三本なのか、何度も何度も、くり返し書くことによって正しい書き方を身につける作業が小学校における学習の基本と筆者は考えている。

送り仮名にしても「細い」と「細かい」や「上がる」と「上る」のように、同じ漢字でも送り仮名で読みわけられる漢字がある。それらをしっかりと学習することが、小学校や中学校での大切な学習のはずである。実習日誌からピックアップした「おかしな書き方」「チグハグな書き方」は、小中学校における学習への取り組み方に問題があるとの証拠ではないだろうか。

筆者は幼児期に身につけてほしい心情として「集中してとりくむ心」「最後まできちんとやりとげる心」が重要と考えているが、それは日々の生活にコツコツとねばりづよく取り組むことによって自然に身についていくのではないだろうか。

ところが、最近は「結果ばかりを求める」や「楽しいことばかりをしたがる」傾向が強まってコツコツとくり返して学習することを嫌がる傾向が強いように感じられてならない。

これでは小学校以降の学習の質を高めることはできないと言わざるを得ない。そして、「いい加減な学習」が習慣として身につけてしまうと、「子どもの〈いのち〉を護る」ことのできない保育者になってしまう恐れがあるのではないだろうか。

6. 文章トレーニングの必要性

保育者という職業は、非常にやり甲斐があって重要な仕事であるが、命を守ることと人間としての土台造りをするという責任の重い仕事でもある。

それだけに豊かな知識や保育技術と高い倫理観が要求される。筆者が勤務を始めた頃は群馬県立保育大学校で保育士を養成していた（その後に廃校になったため現在は存在しない）が、たまたま手元にあった1979年の卒業生名簿（就職活動用に筆者の父が園長をしていた保育園に送られてきたもの）を見ると、102名の卒業生の約半数が県内トップクラスの「進学校」の出身であったことが知られる。

ところで、現在の保育界を取り巻く状況は非常に厳しい。その1つは、保育者を希望する高校生が減少していることである。筆者が保育者養成に関わり始めた頃は、働く意欲を持った専門職の女性を受け入れる職場は限られていて、その大半が「保母」と「看護婦」であった。それが、上掲の保育大学校への入学生の出身高校に現れている。ところが最近では、男女雇用機会均等法が施行され女性の職業選択の幅が広がっている上に、保育の仕事は「重労働であるにも関わらず給与が安い」と言われているのであるから、希望する高校生が減少しているのであろう。

けれども、このままでは女性の社会進出にも支障が生じかねない（女性が結婚して出産しても安心して働き続けるためには保育施設が不可欠である）だけでなく、人生の土台造りをするという重要な役割を果たす人材もいなくなってしまう。それを防止して保育の重要性を社会の多くの人々に理解してもらうためにも、子どもの命が確実に守られ、人間の基礎造りに貢献できる質の高い保育者を送り出すためにも、養成校の教育に「文章トレーニング」を取り入れて保育者を目指す学生の注意力を高めていくことが求められるのではないだろうか。

もちろん、単なる文章の書き方を知識として「覚える」のではなく、くり返して身体で修得することが必要なのではないだろうか。

【註】

- (1) 読売新聞 2022年9月8日
- (2) 上毛新聞 2022年9月18日
- (3) 『改訂 子どもの教育と福祉の事典』（建帛社 2006年3月）
- (4) そうした観点から、筆者は以前「現代教育の盲点と仏教教育—幼児教育におけるお手伝いの意味—」（日本仏教教育学研究 第25号：日本仏教教育学会 2017年3月）、「短大生の学習態度と仏教教育—教育に及ぼす作務の意味—」（曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要（第18回）：曹洞宗総合研究センター—2017年6月）、「身心一如を忘れた現代社会と仏教教育—身体活動の持つ意味を中心に」（日本仏教教育学研究第26号：日本仏教教育学会 2018年3月）等で、お手伝いや作務（身体活動）の持つ意味について発表したのを参照していただきたい。
- (5) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」（育英短期大学研究紀要 第19号：2002年2月）
- (6) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」参照。
- (7) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」参照。
- (8) 筆者がこれまでに全国保育士養成協議会研究大会で発表した内容を以下に示しておく。

「保育者をめざす学生の基礎学力について—文章表現に見える問題点とその対応—」（全国保育士養成協議会第45回研究大会発表論文集：2006年9月10日・安田女子短期大学）

「保育科学生の文章表現に見える問題点—学習習慣と基本的生活習慣について—」（全国保育士養成協議会第46回研究大会発表論文集：2007年9月14日・城山観光ホテル）

「保育者をめざす学生の想像力を高めるためのこころみ—文章表現に見える問題点を出発点にして—」（全国保育士養成協議会第47回研究大会発表論文集：2008年9月26日・函館国際ホテル）

「文章表現力からみた保育士養成の問題点—短大生の学習意欲と基礎学力を中心に—」（全国保育士養成協議会第48回研究大会発表論文集：2009年9月11日・東北福祉大学）

「保育者をめざす学生の生活と学習について—大学全入時代の問題と保育者の資質—」（全国保育士養成協議会第49回研究大会発表論文集：2010年9月17日・山梨学院大学）

「短期大学における保育士養成と保育者論—学生の描く保育士像と求められる保育者の資質—」（全国保育士養成協議会第50回研究大会発表論文集：2011年9月9日・富山県民会館）

「書くことと話すことからみた保育科学生の問題と対応について」（全国保育士養成協議会第51回研究大会発表論文集：2012年9月7日・京都文教大学・京都文教短期大学）

（2023年1月16日受理）